

江戸時代の日本で歌われたオランダ歌曲について (補遺)

笠原 潔¹⁾

11 Dutch lyrics sung in Japan during the Edo Period (1603-1867)

(Addenda)

Kiyoshi KASAHARA

ABSTRACT

Addenda to my article "11 Dutch lyrics sung in Japan during the Edo Period (1603-1867)" in the previous volume of this issue, especially on "Théâtre de la Foire" (1721-1737, 10vols.) of Le Sage & D'Orneval, which contains the music of a Vaudeville that Aoki Konyo (1698-1769) learned from a Dutchman in 1745.

要 旨

拙稿「江戸時代の日本で歌われたオランダ歌曲について」(『放送大学研究年報』第21号、2003年)に対する補足。取り分け、青木昆陽が延享二(1745)年にオランダ商館長らから学んだ「勸酒歌」の旋律を載せた軽演劇台本集“Le Théâtre de la Foire”(1721-1737)について述べる。この歌は、同台本集の第1巻と第2巻に収録された7編の戯曲(1713-1716上演)でパロディー詩の本歌として使用されているが、この2巻(1737年刊)の巻末譜例集は同台本集の第3巻(1721年刊)の譜例集の印刷プレートを使用したものである。昆陽が学んだのはこの歌のオランダ語歌詞による「勸酒歌」であるが、この歌は本来はフランスのヴォードヴィルであったと推測される。

I. 本 論

拙稿「江戸時代の日本で歌われたオランダ歌曲について」(『放送大学研究年報』第21号、2003年)に関して、以下の3点を補足する。

1. 天和二(1682)年、オランダ商館長ヘンドリック・カンジウスが五代将軍徳川綱吉の前で歌った歌(1)(2)に関して

この歌の歌詞資料を伝えた本木正栄は、文化11(1814)年にも「本木庄太右衛門」を名乗っていることを確認した(片桐一男・服部匡延校訂、『年番阿蘭陀通詞史料』、近藤出版社、1997年、95頁)。従って、上記論文の注10)のうち、「また、彼がこの庄太右衛門を名乗っている理由は」以下の部分を削除する。

2. 『横浜繁盛記』所収オランダ歌曲(1)(2)(3)に関して

『横浜繁盛記』の著者・校閲者として名前が挙げられている「錦溪」「太平逸士」は、ともに幕末の洋学者であった柳川春三の号であることを確認した(尾佐竹猛、「新聞雑誌の創始者 柳川春三」(二)、『伝記』第1巻11月号、1934年10月、ならびに「新聞雑誌の創始者 柳川春三」(四)、『伝記』第2巻2月号、1935年1月)。従って、上記論文の注18)のうち、最初の二つの文を削除する。

なお、第1曲の歌詞に出てくる「ウェストファーレン王」というのは、1807年にナポレオンが弟ジェロームを国王に据えて建国した「ウェストファリア王国」(1807-1815)の国王を指すと思われる。そうであるとすれば、この歌はナポレオン戦争中もしくはその後には作られた歌ということになる。

¹⁾ 放送大学助教授(「人間の探究」専攻)

3. 青木昆陽が習った「和蘭勸酒歌」(延享二〔1745〕年)に関して

この歌の旋律を収めた台本集“Le Théâtre de la Foire, ou l’Opéra Comique…”(全10巻)は、原本が国立音楽大学附属図書館に所蔵されていたことが判明した(国立音楽大学附属図書館特別所蔵文庫、S 0-048～S 0-057)。原本調査の結果、明らかになった点を以下に記す。

国立音楽大学附属図書館に所蔵されている原本は革装で、第1巻のタイトルは、以下の通り(斜線は改行を示す)。

LE/ THEATRE/ DE/ LA FOIRE,/ ou / L’OPERA-COMIQUE./ CONTENANT LES MEILLEURES PIÉCES / qui ont été représentées aux Foire/ de S. Germain & S. Laurent./ Enrichies d’Estampes en Taille-douce, avec / une Table de tous les Vaudevilles & autres / Air gravez-notez à la fin de chaque / Volume./ Recueilles, revûës,^(ママ) corrigés, / Par Mrs. Le Sage & D’Orneval. / Tome I. / A PARIS / Chez PIERRE GANDOUIN, Quay des Au- / gustins, la deuxième boutique à la descente / du Pont-neuf, à la Belle-Image / M.DCC.XXXVII / Avec Approbation & Privilege du Roy.(市場劇もしくはオペラ・コミーク¹⁾。サン・ジェルマンならびにサン・ローランの市で上演された最良の作品を含む。銅版画で飾られ、ヴォードヴィルその他の歌の譜例一覧を各巻末を含む。編集・校閲、ル・サージュおよびドルヌヴァル。第1巻。パリ、ピエール・ガンドゥアン、オーギュスタン河岸、ポン・ヌフを渡って2軒目、ベル・イマージュ。1737年。国王陛下の認可ならびに特権取得済み)。

サイズは、革表紙サイズで縦約15.9センチ×横約9.4センチ、用紙サイズで縦約15.5センチ×横約9.0センチのオクターヴォ版である。厚さは、第1巻の場合、約3.3センチであるが、巻ごとに頁数が異なるため、巻によって多少異なる。

この戯曲集は、タイトルに示されている通り、サン・ジェルマンでの冬の市ならびにサン・ローランでの夏の市の際、市場の一郭で上演された音楽劇の台本集である。この「市場劇」は、オペラ座やコメディ・フランセーズによる度重なる妨害や異議申し立てに耐えながら上演が続けられ、1716年にはついに「オペラ・コミーク」を名乗ることが認められた²⁾。アルカンヤスカラムーシュなど、イタリアのコメディ・デラルテの役柄を主な登場人物に据え、ヴォードヴィル(「街の声」。街角で歌われていた流行歌)その他の歌の替え歌を歌い継ぎながら筋を進行させていく音楽喜劇であった。当初は、これらの歌を役者が歌うことは禁じられ(舞台での歌唱は、オペラ座の特権であったから)、当該場面で歌われる歌の歌詞を記した垂れ幕を舞台上に掲げて聴衆たちが代わりに合唱する(その間、役者はパントマイムを演じる)方式で公演されていたが、多額の補償金と引き替えにオペラ座との妥協が成立し、1714年以降は役者がこれらの歌を舞

台上で歌うことが可能となった。1715年からは、歌と歌の間に短い散文台詞を差し挟んで劇を進行することも認可された³⁾。この台本集に収められた台本では、替え歌歌詞をどの旋律で歌うかは、巻末譜例集に収められた本歌旋律の整理番号と一般に通用している曲名とで示され、巻末譜例集にはそれらの本歌旋律が整理番号順に掲載されている。

第1巻から第9巻-2まで、収録された台本が上演年代順に並べられている。舞台上で替え歌に使用された歌や歌の合間に挿入された器楽舞曲⁴⁾は、流行の推移を反映して、時代によって異なる。そのため、巻末譜例集の内容は、巻によって異なる。

今、全10巻の出版年と、巻末譜例集の内容の違い(A, B, Cの記号で区別する)、および各巻に収められた作品の上演年代を示すと以下ようになる。

巻	出版年	巻末譜例集	収録作品上演年
I	1737	A	1713-1715
II	1737	A	1715-1717
III	1721	A	1718
IV	1724	B	1720-1721
V	1724	B	1721-1722
VI	1728	C	1725-1728
VII	1731	D	1728-1730
VIII	1731	E	1730、1724 (1730再演)、1726
IX-I	1737	F	1731-1736、1723
IX-II	1737	G	1732-1734

作品は、基本的に上演年代順に並べられている。時折、年代がかけ離れたもの(第8巻に収められた1726年の作品と、第9巻-1に収められた1723年の作品)があるが、これは以前の巻に漏れていたものを収めたものであろう⁵⁾。

1731年から1736年にかけて上演された作品は、第9巻の二つの巻に分けて収められている。ここでは、収められた作品は、上演年代順ではなく、使用する曲によって分けられたようである(FとGの記号で示したように、巻末譜例集の内容が異なる)。最終巻を第10巻とせず、第9巻-2とした理由は、その点にありよう。

この10巻を出版年代順に並べ直すと、以下ようになる。

巻	出版年	巻末譜例集	収録作品上演年
III	1721	A	1718
IV	1724	B	1720-1721
V	1724	B	1721-1722
VI	1728	C	1725-1728
VII	1731	D	1728-1730
VIII	1731	E	1730、1724 (1730再演)、1726
I	1737	A	1713-1715
II	1737	A	1715-1717

IX-I	1737	F	1731-1736、1723
IX-II	1737	G	1732-1734

この表を見ると、全10巻からなるこの台本集は、次のような手順で編集されたことが分かる。すなわち、各巻に収める戯曲は年代順に並べる基本方針が最初に立てられた。1720年頃のことであろう。ところが、何らかの理由から最初の2巻の編集は後回しにされ、比較的最近上演された1718年の作品を収めた第3巻から出版が開始された。最初の2巻に収める予定の1713年以降の作品は、上演から少し時間がたっており、台本が散逸するなどの状況から資料の収集・整理に手間取ることが予想されたためではなかろうか。ただし、巻末譜例集の楽譜プレートは第1巻—第3巻共通のものを使用することで最初から構想は立っていたようである。実は、青木昆陽がオランダ商館長らから学んだ“Lampons, lampons”のリフレインを持つ歌は、第3巻に収められた台本には登場しない。それにもかかわらず、この台本集の最初の巻として1721年に出版された第3巻の巻末譜例集にこの旋律が収められているのは、最初の3巻を一括したものとして出版する意図が当初からあったことを示している。

第3巻の刊行に続いて、比較的最近の1720-1722年に上演された台本を収めた第4巻、第5巻が1724年に刊行された。

さらに第6巻（収録作品上演年代は1725-1728年）が1728年に、第7巻（収録作品上演年代は1728-1730年）と第8巻（収録作品上演年代は1730年。1730年に再演された1724年の作品を含む。ほかに、1726年の作品が一つ含まれているが、これは以前の巻に漏れていたものを補ったものと思われる）が1731年に出版された。これらは新作の発表を待って編集が開始されたものと思われる。つまり、1720年頃にこの台本集刊行の企画が立てられた時に、後続の巻は将来の作品の発表をまって刊行する方針が既に立てられていたのではないかと推測される。

この間、第9巻-1に収められた1723年の作品から第6巻に収められた1725年の作品まで、作品の上演時期が2年間飛んでいるが、これは、以下の状況と関連しているのかもしれない。“*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*”の“*Théâtres de la Foire*”の項によると、1715年7月にル・サージュの作品《テレマーク》がサン・ローランの市場劇場で初演された。この作品は、デトーシュのオペラのパロディーであったというが、それはともかく、開幕の日、オペラ座もコメディイ・フランセーズも客席がガラガラになったという。その仕返しとして、「1718年11月から1724年まで市場劇場では人形劇と綱渡り舞踊しか上演許可されなかった」という。実際には、“*Le Théâtre de la Foire*”の台本集には1718年から1723年にかけて上演された28作品が第3-第5巻および第9巻-1に収められているから、日付に関しては事実誤認があると思われるが、ともかく、この台本集に収められた作品の上演年代が1723年から1725年まで飛んでいる背景には何かそのような事情があったのかもしれない。この点に関して、詳しい状況は未詳である。

1737年に、1731-1736年に上演された作品を収めた第9巻が二つの巻に分けて刊行された（第9巻-1、2）。先に述べたように、二つの巻のそれぞれに収められた台本は、劇の中で使用する曲の違い（巻末譜例集の違い）によって分けられたのではなかろうか。なお、第9巻-1には、1723年の作品が1点収められているが、これは以前の巻に漏れていたものを補ったものであろう。

同じ年に、1713-1717年の作品を収めた第1巻と第2巻がようやく刊行された。これは、この時期に上演された台本の収集・編集がこの頃ようやく完了したことを示すものと思われる。巻末譜例集の印刷には、1721年に出版された第3巻の譜例集の銅版プレートが使用された。そのことは、譜例の印刷状態からも確認される。国立音楽大学に所蔵されているこの台本集の巻末譜例集の印刷面を観察する限り、このプレートは、



譜例 1

第1巻、第2巻の印刷時にはかなり摩滅が進んでいたことが確認される。

青木昆陽が習った歌は、この台本集の第1-第3巻の巻末譜例集に第64曲として収録されている（譜例1）。リフレイン部の冒頭に、“Lampons, lampons”の言葉が記されているので、昆陽が習ったのがこの歌であったことが分かる。

昆陽が習った歌は、歌詞がオランダ語で書かれていた。また、昆陽がこの歌を習うのに先立って、David Questiers によるこの歌のオランダ語の替え歌が1654年にアムステルダムで出版された歌集に収録されていることは先に記した⁶⁾。しかし、この歌は元々はフランス起源の「酒飲み歌」であったろう。“Lampons”という言葉は、オランダ語では語源的にも文法的にも語釈が付かないが、フランス語では、“lamper”（“laper” [= 「飲む」] が鼻濁音化した動詞で、「がぶがぶ飲む」の意味）の一人称複数形として理解できる。史料的にはオランダ側（1654年に出版されたDavid Questiers による翻案詩）の方がフランス側（1721年に出版された“Le Théâtre de la Foire”の第3巻）よりも先行するが、おそらく本来は、この歌は、“Lampons, lampons, camarades, lampons”（「飲もう、飲もう、友よ、飲もう」）のリフレインを持つ、フランス起源の「酒飲み歌」であった、と推測される。

“Le Théâtre de la Foire”では、この歌の使用例は、第1巻、第2巻に収録された台本のうち、1713-1716年の作品に集中している。以下に示すように、第1巻では、収録された10編の台本中4編で使用されており、第2巻では、収録台本10編中の3編で使用されている。ところが、1718年に上演された9編の台本を収めた第3巻では、巻末譜例集にこの歌の旋律が収められているにもかかわらず（先に述べたように、第1-第3巻の巻末譜例集の印刷には、同一の銅板プレートを使用する方針が早くに立てられていたために、収録されたようである）、この歌を替え歌に利用した作品は見られない。第4巻以降になると、この歌の旋律を巻末譜例集に収録することすら行われていない。市場劇でのこの歌の使用は1716年頃には終わったものと見られる。ここから、パリでのこの歌の流行は1716年頃に止んだと見ることもできようが、この歌の流行の長い前史を考えると、一概にそうとも断定できない。おそらく、1713年から1716年にかけて、市場劇の中でこの歌を盛んに使用したために、1717年頃になると、この歌の使用が陳腐化したと感じられるようになった、もしくはこの歌の替え歌創作のアイデアを台本作者側が使い尽くしてしまったと考える方が適切でないかと思われる。

以下、この台本集でのこの歌の使用例と、当該個所での替え歌歌詞を示す。最初に、この歌を使用している台本のタイトルと、歌唱個所（〔 〕内は、各巻での当該頁）、ついでこの歌を歌唱する役柄名（全て大文字で表示）の後に替え歌歌詞を示す。役柄名が複数書かれているものは、この歌が「掛け合い」の形で歌

われたことを示す。なお、本文中の‘bis’の文字は、その行の反復を示す指示である。

第1巻（収録台本10編中、4編で使用）

1. ARLEQUIN/ THÉTIS./ Pièce en un Acte./ Par Monsieur le S**./ Représentée à la Foire de S./ Laurent 1713⁷⁾.
Scene V [P.75]

THÉTIS

Air 64. (*Lampons, lampons.*)
Vous êtes fort engageant; *bis*.
Mais sçachez, Monsieur l'Agent, *bis*.
Que Jupin dans cette affaire
Ne sera que de l'eau claire.
Lampons, lampons,
Camarades lampons.

2. ARLEQUIN/ MAHOMET, /ET/ LE TOMBEAU/
DE/ NOSTRADAMUS./ Pièces chantées par les Ac-
/teurs, d'un Acte chacune, / liées par un Prologue inti-
/tulé :/ LA FOIRE/ DE/ GUIBRAY./ Par M. le S***./
Représentées à la Foire de S./ Laurent 1714.
Prologue “Guibray”, Scene I [p.110]

SCARAMOUCHE

Air 64. (*Lampons, lampons.*)
Allons, Arlequin, joignons *Bis*.
Au plutôt nos Compagnons *Bis*.
Et concertons, sans remise,
Cette grotesque entreprise.
Lampons, lampons,
Camarade, lampons.

3. ARLEQUIN/ SULTANE FAVORITE./ Pièce en
trois Actes./ par Monsieur le T**./ Représentée à la
Foire de S./ Germain 1715.
Acte Première, Scene II [p.206]

ARLEQUIN

Air 64 (*Lampons, lampons.*)
Lorsqu'on livra le combat, *Bis*.
Je me couchai tout-à-plat; *Bis*.
Puis, me glissant sur l'échine,
Je tombai dans la cuisine.

PIERROT

Poltron ! poltron !

ARLEQUIN

J'aime à filer du long.

4. PARODIE/ DE/ L'OPERA/ DE/ TELEMAQUE./
Pièce d'un Acte./ Par Monsieur le S**./ Représentée à

la Foire de S./ Germain 1715, avec *la Cein- / ture de Venus*.⁸⁾
Scene VI [P.363]

TELEMAQUE

Air 64. (*Lampons, lampons*)

De quoi se mêle Pallas? *Bis*.

Oh! Son choix ne me plaît pas! *Bis*.

Que sais-je? son Antiope

Est peut-être une salope.

IDAS

Non, non, non, non,

Telemaque, non, non.

第2巻（収録台本10編中、3編で使用）

5. Les Eaux de Merlin./ Pièce d'un Acte, précédée/
d'un Prologue./ Par M. le S***/ Représentée à la Foire
de Saint/ Laurent 1715.

Prologue des Eaux de Merlin, Scene III [P.94]

MEZZETIN

Il a ma foi raison.⁹⁾

Air 64. (*Lampons, lampons*)

Nous voyons vingt Charlatans, *bis*.

S'enrichir en peu de tems [sic], *Bis*.

Qui ne se tirent d'affaires, *bis*.

Qu'avec de l'eau toute claire.

Lampons, lampons,

Camarade, lampons.

6. L'Ecole des Amans./ Pièce d'un Acte./ Par Messieurs
le S** & F***./ Représentée à la Foire de Saint/
Germain 1716.

Scene VIII [p.344]

OLIVETTE

Et la Brunette étourdie, la connaissez-
vous, Monsieur le Faquin?¹⁰⁾

Air 64. (*Lampons, lampons*)

Voilà mon Railleur nigaud. *Bis*.

ARLEQUIN

Je suis donc le Moricaud? *Bis*.

Ah! Vous me cherchez querelle!

Si je vous déplais, la Belle,

Rompons.

OLIVETTE

Rompons.

ARLEQUIN

Tope,

OLIVETTE

Et tinque.

Tous-Deux.

Rompons.

7. Arlequin/ Hulla,/ ou/ La Femme/ Repudiée./ Pièce
d'un Acte./ Par Messieurs le S**./ & D'Or**./
Représentée à la Foire de/ S. Laurent 1716.

Scene XIV [p.383]

CALTAPAN, *tenant une Bouteille & un verre*.

Air 64. (*Lampons, lampons*.)

Voice du vin de Chiras, *bis*.

Qui vaut mieux que l'hypocras. *bis*.

(*à Arlequin, versant du vin dans un verre*.)

Remarquez-vous comme il brille?

ARLEQUIN

Vertuchou! Comme il petille!

Lampons, lampons,

Camarades, lampons.

注

- 1) “Comique”は、言うまでもなく、「世話物」、すなわち、「Tragédie」が神話ないしギリシャ・ローマの古典に取材した「時代物」であるのに対して、その時代に即した軽快な内容の舞台作品であることを意味する。
- 2) Daniel Hearts, ‘Terpsichore at the Fair: Old and New Dance Airs in Two Vaudeville Comedies by Lesage’, in Anne Dhu Shapiro (ed.), “*Music and Context—Essays for John M. Ward—*”, Department of Music, Harvard University, 1985.および “*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*” の ‘Théâtres de la Foire’ の項による。
- 3) Daniel Hearts, 前掲論文、282頁。
- 4) “*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*” の ‘Théâtres de la Foire’ の項によると、伴奏オーケストラの楽団員数は、1714年の時点で、9人ないしは10人であったという。
- 5) 何らかの認可に関わる問題や、巻末譜例集に収録された曲目との整合性によるものかもしれないが、その辺りの問題は未検討である。
- 6) 拙稿、「江戸時代の日本で歌われたオランダ歌曲について」、『放送大学研究年報』第21号、2003年。
- 7) この作品が上演された1713年の時点では、当該歌曲を役者たちが歌うことが禁止されていたために、この歌は聴衆たちによって合唱された（Daniel Hearts, 前掲論文、282頁）。1714年以降は役者たちの歌唱が許可されたから、他の6作品では、“Lampons, lampons”の歌は役者たちによって歌唱された。2番目に挙げた “Arlequin Mahomet et le Tombeau de Nostradamus” のタイトルに “pièces chantées par les Acteurs”（「役者たちによって歌唱」）と記されているのは、そのことを示すと思われる。
- 8) 本文中に記したように、この作品は、デトゥーシュのオペラのパロディーであるという。
- 9) この行のように、歌と歌の間に短い散文の台詞が挟まれるようになったのは、1715年からである。
- 10) 同上。

謝 辞

“Le Théâtre de la Foire” に関しては、国立音楽大学附属

図書館（図書館長、礒山雅教授）から原本調査を許可する御配慮をいただいた。また「オペラ・コミック」に関しては、同図書館の長谷川由美子氏から種々関係資料を御教示いただいた。ここに記して、感謝する。

（平成16年10月31日受理）